

日清戦争期における欧米の対日観

——*The Times* と *The New York Times* を中心に——

中塚悠理子
(玉井研究会 4 年)

序 章

- I 欧米新聞における日本の注目度
 - 1 *The Times*、*The New York Times* について
 - 2 報道方法の特徴
 - 3 報道量の変化
- 小 括
- II 黄海海戦における対日観
 - 1 *The Times* の対日観の変化
 - 2 *The New York Times* の対日観の変化
- 小 括
- III 旅順虐殺事件における対日観
 - 1 *The Times* の対日観の変化
 - 2 *The New York Times* の対日観の変化
- 小 括
- 終 章

序 章

日清戦争は近代日本における最初の対外戦争であり、その意義に関して様々な角度から研究が行われている。国内においては、日本国民にナショナリズムが浸透し¹⁾、日本人としての共通認識が育って国民国家が形成される契機となった²⁾。また、戦争の結果を受けて軍人の社会的地位が高まり、その軍隊を統率する存在

としての天皇が受け入れられるようになったとの評価もある³⁾。さらに国外においては、清が最後の属邦だった朝鮮を失ったことで、清を中心とする宗属関係が基軸となっていた東アジア世界が解体して近代主権国家体制が形成されていったともされている⁴⁾。

以上のように位置づけられている日清戦争であるが、極東の小国であった日本が、開国して間もない時期にアジアの大国であった清に勝利していく過程が実際に欧米でどう見られ、日本に対する認識がどのように変化したのかについて述べているものはほとんどない⁵⁾。本論文においては、当時発行されていたイギリスの *The Times* とアメリカの *The New York Times* 内の日本に関する記事を分析することで、当時の欧米人がアジアにおける日本の台頭をどう観察していたのかについて考察を加えていく。

なお、日清戦争における事実関係の推移は『日清戦争』（原田敬一、2008年）を参考にし、また、本文中の英文の和訳は筆者によるものとする。

I 欧米新聞における日本の注目度

本章では、研究対象としたイギリスの *The Times* とアメリカの *The New York Times* の沿革について説明するとともに、各新聞における報道方法の特徴と日本についての報道量の変化について考察する。

なお、第2節、第3節における記事数の集計の際は、*The New York Times* が平日と土日の発刊だったのに対して *The Times* は平日と土曜日のみが発刊だったため、日曜日に関しては *The Sunday Times* を参照し、その合計した数を “*The Times*” と表記して2紙を比較している。

1 *The Times*、*The New York Times* について

本節では、研究対象としたイギリスの *The Times* とアメリカの *The New York Times* の、創刊から日清戦争の時期までのそれぞれの沿革について簡単に確認したい。

まず *The Times* についてである。同紙は、イギリスで全国的に購読されている、高級紙⁶⁾ に属する朝刊紙の一つである。

1785年にザ・デイリー・ユニバーサル・レジスター (*The Daily Universal Register*) として創刊され、1788年にザ・タイムズ (*The Times*) に名前を変えた。19世紀初

めに他社に先駆けて印刷のスピード化や通信網の拡充、世論を反映する社説の掲載をしたことによってヨーロッパ随一の新聞としての地位を占めた。1855年に印紙税が廃止されると安い新聞を無産階級に提供する大衆紙が多く生まれ、1870年代には最盛期に比べて発行部数が減少していった。しかし19世紀を通じてタイムズ紙は当時の政治思想に無視できない影響を与え、「イギリスの声」(the voice of Britain)としてその名声を確立した⁷⁾。

次に *The New York Times* について述べたい。同紙は現代アメリカ新聞の最有力紙である日刊の高級紙で、世界的に権威ある新聞として堅実な地位を占めている新聞である。

1851年にザ・ニューヨーク・デイリー・タイムズ (*The New York Daily Times*) として創刊され、1857年にザ・ニューヨーク・タイムズ (*The New York Times*) に名前を変えた。創刊号の1万部はすぐに売り切れ、3ヶ月でその発行部数は2万部に達して盛況となったが、1893年から発行部数は減少していった。しかし1896年に現在にも続くスローガンとして「活字にするのに適したあらゆるニュース」(“All the News That’s Fit to Print”)を掲げたことで10年間で発行部数は倍増し、盛況ぶりが復活することになる⁸⁾。

以上、*The Times* と *The New York Times* の沿革について簡単に確認した。両紙ともに日清戦争期は経営が低迷していた時期ではあったが、イギリスとアメリカをそれぞれ代表する高級紙の一つとして高い地位を占めていたのである。

2 報道方法の特徴

本節では、各新聞における日清戦争に関係する記事のタイトルのつけ方や記事の掲載場所から、各新聞の報道方法の特徴について考察する。

まずは記事のタイトルから読み取れる特徴について述べたい。

The Times における記事のタイトルは、読者に先入観を持たせないようなものが多く、すべての記事のうち約半分がそのようなタイトルになっている⁹⁾。一方で *The New York Times* は報道内容を要約したものをタイトルにしており、勝者がどちらなのかがわかるようなタイトルが多かった¹⁰⁾。

この2紙の違いを最もよく表すものが *The New York Times* の1894年10月28日に掲載された記事である。この記事は *The Times* の1894年10月13日の記事を転載したものであるが¹¹⁾、*The Times* では“The Outlook in China” (『清の見通し』)¹²⁾ というタイトルで清国人の考える、清が戦争に勝つ要因を記述していたものの、そ

表1 掲載場所別の記事数

記事の掲載場所	<i>The Times</i>	<i>The New York Times</i>
事実報道	402	529
社説	44	102
投書欄	47	11
特別記事	104	0
1面	8	39

の内容はタイトルに明確に反映されていなかった。しかし *The New York Times* の記事のタイトルは“China Will Eventually Win”（『清は最終的に勝つ』¹³⁾）となり、清が勝利すると考えられているというその記事内容をタイトルに反映させている。

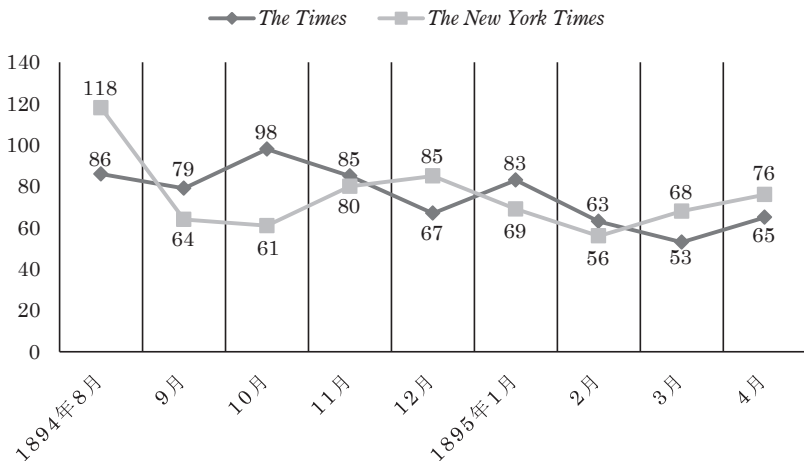
次に記事の掲載場所から読み取れる各新聞の報道方法の特徴について述べたい。表1は、各新聞における記事の掲載場所とそれぞれの記事数をまとめたものである¹⁴⁾。

特徴的なのは、*The New York Times* の事実報道の多さである。*The Times* は一つ一つの記事の内容が詳細であることから長くなっていて1日に掲載される記事数はそれほど多くない。それとは対照的に *The New York Times* は短い記事を数多く掲載していることから、注目されると記事数が急増しており、そのために *The Times* との間に事実報道の数に大きな差が生まれている。

次に注目すべきことは、事実報道の次に多い記事が、*The Times* は特別記事、*The New York Times* は社説であるということである。*The New York Times* の社説が多い要因は前述した事実報道と同じで、*The Times* は長い社説を1日に3記事しか掲載していないのに対して、*The New York Times* は短い社説をほぼ一つの面全体を使って数多く掲載していたためである。また、*The Times* の特別記事とは、事実報道で掲載されている特派員からの報告を照らし合わせて何が真実なのかを考え、戦術について考察を加えている記事である。つまり、*The Times* は日清戦争の戦況を詳細に報道して丁寧に考察を加えているが、*The New York Times* は短い記事で、日清戦争だけでなく世界の出来事を数多く報道していたのである。

そのほかの特徴としては、*The Times* の投書欄の記事数の多さが挙げられる。投書欄の記事は唯一筆者名が明記されているものであり、投稿者同士お互いに批

グラフ1 記事数の変化



判し合うことが多いのが特徴で、これは2紙に共通している。しかしその中でも *The Times* は日清戦争に関する投書が多いことから、イギリスにおける日清戦争に対する個人的な関心度の高さが窺える。一方、*The New York Times* は1面に掲載している記事数の多さが特徴的である。同紙の特徴は多くの出来事に関する記事を掲載する報道姿勢を取っていた中で、日清戦争に関する記事を1面に何度も掲載していることから、日清戦争に対する関心度の高さが窺えるだろう。

以上、両紙の記事のタイトルと記事の掲載方法を分析した。両紙の編集方針や紙面づくりには差異があるものの、日清戦争に関する記事の取り扱い方から戦争に対する関心を少なからず抱いていたことが明らかになった。

3 報道量の変化

本節では、両紙において掲載された日本についての記事数をもとに、日清戦争中における日本への注目度の推移を示しておきたい。

グラフ1は、宣戦布告した1894年8月から日清講和条約が締結された1895年4月までの期間で、日本の登場する記事数の変化をグラフにしたものである¹⁵⁾。このグラフを通じて、日清戦争の始まりと終わり以外で記事数が増加するタイミングが2紙の間で異なっていることがわかる。その点から考察を加えていきたい。

まず、1894年10月に注目したい。この月に *The Times* は前月に比べて記事数が

急増し全期間において最も多い記事数を記録しているが、*The New York Times* は横ばいである。10月は9月17日より行われた黄海海戦の翌月であることから、海軍国家であるイギリスが黄海海戦とその戦いにおける日本の勝利に強い関心を示していたことがわかる。一方で *The New York Times* は黄海海戦が発生したときにはそれほど強い関心を持っていなかったため¹⁶⁾、10月に記事数が増加することはなかった。しかし、海戦の後に日本の勝利が積み重なるにつれて日本への注目度は上がっている。これは、日清戦争において特に大きな動きがなかった10月以降、*The Times* では記事数が11、12月と減少しているのと対照的に *The New York Times* では増加していることからわかる。

1894年12月に *The New York Times* では、後述する旅順占領の際に発生した日本軍による旅順虐殺事件が注視され、記事数が増加した。他方、*The Times* では旅順虐殺事件の第一報はその1ヶ月前の11月に報道されたが事件の詳細は未だ知らされておらず、記事数は減少している。しかし1895年1月になると旅順虐殺事件の詳細の情報が入り、増加した。

1895年3月になると、再び *The New York Times* の記事数が増加に転じている。これは、清国全権大使の李鴻章狙撃事件に対して *The New York Times* のほうが *The Times* より高い関心度を持っていたためである¹⁷⁾。

以上、記事数の変化から考察し、1894年9月17日に発生した黄海海戦以後と、1894年11月21日の旅順占領の後に発生した旅順虐殺事件の発覚時に、両紙で日本が特に注目されていたことが明らかになった。

小 括

本章では、イギリスの *The Times* とアメリカの *The New York Times* の沿革を説明するとともに、両紙の報道方法の特徴と日本についての報道量の変化について考察した。

The Times と *The New York Times* は、当時のイギリスとアメリカにおいて知識層を対象にした高級紙の中でも代表的な新聞だった。2紙の違いとしては、*The Times* が読者に先入観を持たせないタイトルで事実報道と特別記事を用いて丁寧に戦況を報道していたのに対して、*The New York Times* は勝者をはっきりとさせたタイトルで事実報道と社説を用いて短い記事で戦況を報道していたことが挙げられる。また、2紙がそれぞれ特に高い関心度を示した出来事が、*The Times* は黄海海戦と旅順虐殺事件、*The New York Times* は旅順虐殺事件と李鴻章狙撃事件

だった点で異なっている。その中でも、黄海海戦以後と旅順虐殺事件の発覚時には日本に関する記事数が増加しているという点において共通していた。

以上のことを踏まえ、次章以降では日清戦争期における *The Times* と *The New York Times* の対日観が実際にどう変化したのかについて述べていきたい。

II 黄海海戦における対日観

本章では、日本が最初に大きな注目を浴びた1894年9月17日の黄海海戦に焦点を絞り、その戦いがどのように注目され、さらには同海戦を契機に欧米の対日観がどう移り変わったのかについて考察する。

1 *The Times* の対日観の変化

本節では *The Times* の対日観に注目する。9月20日に黄海海戦の第一報が報道され、次に注目された出来事である日本の旅順占領の第一報が11月24日であるため、ここでは、8月1日の日清戦争開戦から9月19日までを「黄海海戦より前」とし、9月20日から11月24日までを「黄海海戦の後」として、同海戦を境にした対日観の移り変わりを考察する。

前章で述べたように、*The Times* では詳細な戦況報告が多かったため、日本軍に対する評価が対日観に反映していた。その中でも、黄海海戦の前後を通じて日本の軍事力に対して一貫して高い評価を与え続けていたことが指摘できる。

黄海海戦より前においては、日本軍の船舶は東洋で最も強く世界最強に近い銃を装備しており¹⁸⁾、日本軍の行動と装備の完全さが世界中から称賛されていると高く評価していた¹⁹⁾。黄海海戦の後にも、“The Japanese, it need not be said, was in perfect order, complete in all its parts, wanting for nothing in the training and discipline of officers and men, and armed with the most destructive weapons.” (日本軍は言わずもがな、秩序整然としていて、すべてが完全で、将校や兵士の訓練と規律は何も不自由しておらず、そして最も破壊的な武器で武装している。)²⁰⁾ と絶賛している。

しかしその中でも、評価のポイントには変化が生じていた。黄海海戦より前の評価は日本軍の西洋化が完成していることに対する評価であり、日本がヨーロッパから多くのことを学んでいるということが何度も報道された。例えば、日本軍の訓練と規律がヨーロッパの最高モデルから適用されたものであること²¹⁾ や、

日本が世界中の軍事システムを研究して世界各国のものを組み合わせて取り入れたこと²²⁾が評価され、清国軍にヨーロッパ人顧問がいないことを理由に挙げて戦争において日本のほうが優位であると考えていた²³⁾。黄海海戦の開戦直前には、中国軍は組織力の欠如が行動に支障をきたしていると批判したうえで²⁴⁾、“The Chinese may be expected to offer a stubborn resistance; but, if organization, training, leadership, and excellent modern arms are ruling factors in war, the result should not be doubtful.”(清国軍は頑強な抵抗をすると考えられているが、もし、組織力、訓練、リーダーシップ、そして近代的で優秀な武器が戦争の勝敗を決する要因ならば、その結果は疑いようもない。)²⁵⁾と述べており、日本軍の西洋化が勝利の要因になると考えられていたことが読み取れる。

他方、黄海海戦の後にも日本の西洋化について言及している記事は多くある²⁶⁾。しかし日本が西洋化を通じて長年戦争の準備をしてきたことに評価の重心が移っている点において黄海海戦の前と異なる。

その例としては、日本軍は軍事組織全体の改革を行ってヨーロッパで将校を訓練し、あらゆる機会を利用して清に決定的な打撃を与える準備をし、何年もかけて計画を熟成させてきたことによって日本軍が優位に立っているという評価がある²⁷⁾。また、日本が積極的に準備していた間に清は眠っていたことが批判され²⁸⁾、その結果として、“The silent, concentrated energy of the one country is like that of a great ocean steamship, imperceptible to the passengers, and the confused bustle of the other is like a colony of perturbed ants.”(一方の国(日本:筆者注)の静かで集中したエネルギーは、巨大な海の蒸気船の、乗客に感知されないエネルギーのようなもので、もう一方の混乱した喧騒は、乱れたアリの集団のようなものである。)²⁹⁾と表現されるほど、日清両国間の違いがあると指摘されていた。

さらに、黄海海戦の後には、以下のように、西洋化してきた日本がすでに西洋より優れた海軍力を持つようになったとの評価までされるようになっていた。

日本軍が黄海海戦に勝利した理由としては、日本軍の船舶のスピードと、射撃の速度と正確さが清国軍を大きく上回っていたからと分析された³⁰⁾。そのような日本に対しては、“she (Japan:筆者注) possess a military system in many respects superior to that of Great Britain”(日本は多くの点でイギリスより優れた軍事システムを持っている)³¹⁾という評価や、“The Japanese have learnt their lesson from the West so thoroughly that in the judgment of many competent critics they have in certain respects outstripped some of their teachers.”(日本人は西洋から徹底的に学

んだため、多くの有能な批評家の評価によればいくつかの点において先生である西洋を上回っている。) ³²⁾ との評価を受けていた。

このように、戦争を見据えて長年準備をしてきて、その結果としていくつかの側面において西洋より優れた海軍力を持って海戦で結果を残したことに對して、“Japan...is above all things a maritime Power, and it is upon her navy that she especially prides herself.” (日本は何よりも海軍大国であり、特に自国の海軍を誇りに思っている。) ³³⁾ と評され、“Japan is not simply an Asiatic community of the type which we connect with capitulations and a general condition of modified pupilage. She is in transition from that type to the type of a highly civilized naval and military Power.” (日本は、降伏や西洋化をさせた生徒として我々とつながっているただのアジアの地域ではない。日本はそこから、高度に文明化された海軍、軍事大国に移行している段階にある。) ³⁴⁾ と述べられた。さらに、“Japan has already effected enough to convince intelligent men all over the world that henceforth they must reckon with a new Power in the Far East.” (日本は世界中の知識層に、これ以降極東の新しい大国とみなされるべきだと納得させるのに十分な効果をすでに発揮している。) ³⁵⁾ ことや、“Japan is now held to have entered the comity of nations. She is a first-class power.” (日本は今や国際礼讓に参加したとされている。日本は一等国である。) ³⁶⁾ ということが述べられ、黄海海戦を経て日本が新しい大国となったことが世界中に認められたとしたのである。

このように黄海海戦の前後を通じて日本軍の評価は高いものがあつたが、黄海海戦を経てそれは一部において西洋を超えているとまで言わしめるほど高まり、日本は西洋と対等の国として認識されるようになったことがわかる。

以上、黄海海戦を境にした *The Times* の対日観の移り変わりを考察した。同紙の紙面上では一貫して日本は評価されていたが、その中で黄海海戦より前は日本軍の西洋を模倣し、西洋に近づいていることに対する評価だった。それが黄海海戦の後になると、日本が西洋化を通じて長年戦争のために準備してきたこと、すでに西洋よりも優れている点も有する軍事大国となったことへの評価に変じていたことが明らかになった。

2 *The New York Times* の対日観の変化

本節では *The New York Times* の対日観に注目する。同紙では *The Times* と同様に9月20日に黄海海戦の第一報が報道され、次に注目された出来事である日本の

旅順占領の第一報が11月24日であるため、8月1日の日清戦争開戦から9月19日までを「黄海海戦より前」とし、9月20日から11月24日までを「黄海海戦の後」として、同海戦を境にした対日観の変化を考察する。

2紙の大きな違いは、*The Times* が黄海海戦より前の時点で、日本軍の軍事力を見て日本の西洋化が完成していると評価していたのに対して、*The New York Times* は黄海海戦における日本の勝利を受けてから日本の西洋化、文明化の完成を評価するようになった点にある。

しかし、*The New York Times* において海戦の前に日本軍の西洋化について看過されていたわけではない。日本の軍隊はヨーロッパのシステムを見本にして作られていること³⁷⁾ や、何年もの間、多くの日本人将校がドイツ連隊で学んでいたこと³⁸⁾、日本が毎年、国の費用で多くの若い男性をヨーロッパで学ばせていること³⁹⁾ を紹介して、日本がヨーロッパから多くのことを学んできたことを解説していた。そのうえで、“Of all the nations who have set themselves the task of imitation, Japan has been the most apt, and she has effectively demonstrated her supremacy by recent performances.” (模倣をしようとしたすべての国の中で、日本が最も物覚えがよく、その優位性を最近の行動で示している。) ⁴⁰⁾ と評価していた。

また、日本軍の軍事力に対しても *The Times* と同様に、日本海軍は完全に組織化されており⁴¹⁾、世界最速の巡洋艦も保持していて⁴²⁾、強い海軍である⁴³⁾ と高評価している。しかしそのような日本に対する評価をしながらも、人口や保有している船舶と資源の多さによる量的優位が清にあるため最終的に勝利するのは清であると示唆する記事が多い⁴⁴⁾。つまり、黄海海戦より前での *The New York Times* は、日本軍の軍事力や西洋化を評価していたものの、それが必ずしも日清戦争における日本の勝利にはつながらずとは考えられておらず、それ以上に清の量的優位が戦争の結果を左右すると認識されていたことがわかる。

しかし黄海海戦において日本が勝利したことにより、日本の西洋化、文明化が完成したことが評価され始める。

黄海海戦における日本の勝因は、“the advantage of Japan over China in knowledge, enterprise, and patriotism” (知識、積極性、愛国心において清に優越している日本)⁴⁵⁾ と、“splendid courage, admirable military skill, and an excellent knowledge of the latest and most approved war methods” (すばらしい勇気、見事な軍事技術、そして最新かつ最も認められている戦法に対する優れた知識)⁴⁶⁾ や、日本が大型で有能な現代的な艦隊を所有し、その就航に向けて、軍需品だけでなく熟練

でよく訓練された将校と兵士を完全に準備していたこと⁴⁷⁾を挙げており、日本人の気質に加えて、日本が西洋化したことが日本の勝利につながったと考えていたことが窺える。このような要素から、日本がヨーロッパにおけるすべての大国と同じような力とエネルギーを持つ一等国 (first-class power) になった⁴⁸⁾として、日清間の戦いを “between barbarism and civilization, between hoary conservatism and modern progress, between heathenism and Christianity” (野蛮と文明、古い保守主義と現代的進歩、異教とキリスト教の間)⁴⁹⁾、そして “a conflict between Eastern and Western civilization” (東西文明の対立)⁵⁰⁾と表現するようになっていった。

このように、*The New York Times* 紙上では黄海海戦より前に否定されていた日本の西洋化が、日清戦争における日本の勝利の要因として認められていく。黄海海戦の後に日本は、西洋化、文明化が完成して一等国、文明国になったという評価を受けるようになったのである。

さらに注目したいことは、前述したように、黄海海戦の後には日本人の気質としての積極性や愛国心、そして勇気などが黄海海戦における日本の勝利の一因であると認識されていることである。黄海海戦より前にもそのような日本人の気質は指摘されていたが⁵¹⁾、それは日本人の野蛮性を批判する脈絡の中で説かれることも少なからずあり、黄海海戦の後とは若干異なっていた。このことを象徴的に示すのが、日清戦争の宣戦布告前の1894年7月25日に発生した、清国兵を満載したイギリス籍の輸送船、高陞号が日本軍に撃沈された高陞号事件についての記事である。高陞号事件は、“the most disgraceful and wanton piece of savagery of the century” (今世紀における最も恥ずべき凶悪な残虐行為)だと批判された⁵²⁾。あるいは、東洋人の気質について、“They fight...for ‘conquest,’ and for all that that implies in the way of slaughter and plunder.” (彼らは「征服」と、虐殺や略奪という方法で行うすべてのもののために戦う。)としたうえで、清国兵の輸送船の沈没はアジアの戦争においては自然な出来事であると主張した⁵³⁾。つまり黄海海戦より前にいて日本人は、東洋人の特徴としての残虐性を持ち合わせていると考えられており、それを象徴的に示したものが高陞号事件だととらえられていたのである。

しかしこのような評価は黄海海戦の後にはまったく表れず、日本人については、口論もけんかも決してしないやさしくて礼儀正しい人種で⁵⁴⁾、略奪を一切しない⁵⁵⁾とする、正反対の表現が用いられるようになる。この点においても、黄海海戦の後に、日本の西洋化が完成したという評価が定着していく、その変化が窺えるだろう。

以上、黄海海戦を境にした *The New York Times* の対日観の変化を考察した。黄海海戦より前には日本の軍事力や西洋化を評価しながらもそれ以上に清の人口、船舶、資源の多さによる量的優位が戦争の結果を左右する重要な要因と考えられていた。しかし黄海海戦における日本の勝利を受けて、日本の野蛮性を見ての批判は消え、西洋化と文明化が完成して大国の仲間入りをしたという評価が見られるようになったことが明らかになった。

小 括

本章では1894年9月17日の黄海海戦に注目し、その戦いを境にした *The Times* と *The New York Times* における対日観の変化について考察した。

日清戦争の初めから、両紙ともに西洋化している日本の軍事力についてある一定の評価を与える一方で、2紙の間には大きな違いがあり、*The Times* では軍事力が日本の勝利の要因になると考えられていたのに対して、*The New York Times* ではそう考えられていなかった。しかし黄海海戦において日本が勝利したことによって日本の軍事力に対する評価が裏付けられ、その後両紙は共通して日本を大国の一員として評価するようになったのである。

Ⅲ 旅順虐殺事件における対日観

本章では、黄海海戦の次に日本への注目度を高めた、旅順占領後に発生した日本軍による旅順虐殺事件に着目し、事件発覚の際と、1895年4月17日の日清講和条約の締結までに対日観がどう移り変わったのかについて考察する。

1 *The Times* の対日観の変化

本節では *The Times* の対日観に注目する。同紙においては1894年11月28日に旅順虐殺事件の第一報が報道されたが、それは噂話としての報道だった。その後、1895年1月8日になって旅順虐殺事件の詳細が報道されるが、約1ヶ月後の2月2日に日本軍による威海衛の占領が報道されると、以後ほとんど同事件は報道されなくなった⁵⁶⁾。そのため、1月8日から2月1日までを「旅順虐殺事件の報道期間」とし、2月2日から日清講和条約が締結された4月17日までを「日清戦争の終盤」として、旅順虐殺事件の発覚から日清戦争の終わりまでの対日観の移り変わりを考察する。

まず、1894年11月における報道について紹介したい。11月28日には、清国軍による日本人捕虜に対する残酷な暴力の報復として、旅順占領後に200人の清国人が虐殺された (massacred) という噂があることが述べられたが、“the story needs confirmation” (この話は確認が必要である) と、留保付きで報道されていた⁵⁷⁾。その翌日に、*The Times* の特派員からは、多くの日本人捕虜が清国軍によって斬首されて虐殺された (beheaded and mutilated) ため、日本軍は情け容赦ない攻撃をして、多くの清国人兵士と民間人を撃ち殺したという情報が伝えられた⁵⁸⁾。これに対して *Central News* の特派員から、公平な戦闘以外で殺害された清国人はいないと主張する報告が手に入る⁵⁹⁾。つまり旅順占領の後すぐに旅順虐殺事件の情報は入手されたが、その詳細な内容や真偽は明らかになっていなかったのである。

しかし翌年の1月8日には旅順虐殺事件の詳細が報道され、日本軍の残虐性が明らかになったとして、日本評価は一転する。日本軍が、行く手を横切ったすべての生き物を殺していること、数十人の清国人を探し出して撃ち殺してずたずたに斬っていた (hacked to pieces) こと、ひれ伏して地面に頭をつけていた清国人を無慈悲に虐殺していた (butchered mercilessly) こと、射程内のものをすべて虐殺していった (slaughtering all within range) こと、逃げようとした老人と10歳くらいの子供を何度も剣で斬りつけたこと、清国人の集団が背中後ろに手をまわして縛られて5分間弾丸を浴びせた後にずたずたにたたき斬った (hewn in pieces) こと、すべての性別と年齢の逃亡者で満員の清の帆船に向かって何度も何度も一斉に射撃をしていたことなど、旅順占領後4日間、朝から晩まで残虐行為が行われていたと報道された⁶⁰⁾。

このような日本軍の虐殺は、“barbarous Eastern style” (野蛮な東洋の様式)⁶¹⁾ であって “Eastern cruelty” (東洋の残酷さ)⁶²⁾ を表しており、その虐殺の方法は、“ghastly form of mutilation that Oriental cruelty has invented” (東洋の残酷さが生んだぞっとする虐殺の形態)⁶³⁾ であると表現された。日本の伝統は残忍なものであると認識されていたところに⁶⁴⁾、日本軍が東洋人の残虐な気質に基づく行動をしたと解説していることから、日本が西洋化する前の野蛮な東洋国家に逆戻りしたと批判していることが読み取れる。

また、このような虐殺が明らかになったことによって、ヨーロッパにおいて日本人の中に称賛するものを見つけようとする姿勢は失われ⁶⁵⁾、“the admiration excited by the skill of the Japanese in the organization and direction of their forces

has been cooled a good deal” (日本軍の組織力と指揮の技能に対して高まっていた称賛はかなり冷めている)⁶⁶⁾とすら述べられ、日清戦争が始まった当初からあった日本軍に対する高評価が一気に失われていったことも窺える。

しかし、日本軍が虐殺という行動を取ってしまった原因についても言及し、考慮されるべき点もあると述べている。その一つは、旅順占領前の戦闘において、清国軍によって日本人兵士が虐殺され、その遺体を日本軍が目撃していたことである。このように仲間が虐殺されたことを目撃したことによって敵に対して激しい怒りを感じることは人間として当然であり⁶⁷⁾、その復讐が極端な範囲に達することは許容されることである⁶⁸⁾と弁じていた。また、清国人兵士が農民の格好をして農民にまぎれて攻撃していたことから、日本軍がすべての清国人を敵としてみなしてしまったことは明らかに正当化されるとしていた⁶⁹⁾。

その一方で、日本軍による虐殺には上記のように考慮されるべき点があるとしながらも、清国軍と同じ野蛮な方法を用いて (in the very same barbarous manner) 復讐したこと⁷⁰⁾、虐殺が個人的な行為ではなく日本軍全体によるものだったこと⁷¹⁾、また、捕虜を捕らえることが文明国の義務であるにもかかわらず捕虜にせずに住民を無差別に殺害したこと⁷²⁾を批判している。この点から、旅順虐殺事件の報道期間においては一貫して日本に対して批判的な姿勢を持っていたことが窺える。

しかし、2月2日に威海衛占領の第一報が掲載されてから再び日本評価が戻ることになる。それは、威海衛が清にとっては旅順の次に重要な砦だったことから数ヶ月かけて防御を強化していたにもかかわらず⁷³⁾、日本軍があまりにも早く占領したことによって再び日本軍の軍事力への評価が高まったからである⁷⁴⁾。

特に日本の海軍力に対する評価が高まり、強力に要塞化された旅順と威海衛を陥落させることができたのは、日本軍がイギリス軍の戦術を研究して⁷⁵⁾、最高の戦争指導に完全に従って船を運用した結果であるとしていた⁷⁶⁾。さらに、“In future Japan must be reckoned with as a great naval Power in Eastern waters.” (将来、日本は東洋の巨大な海軍大国とみなされるに違いない。)⁷⁷⁾とすら述べて、再び日本を大国として評価するようになったのである。

さらに、1895年3月24日に、清国全権大使の李鴻章が下関で開催された第3回講和会談の帰りに狙撃された李鴻章狙撃事件が発生しても日本に対する評価が動揺することはなかった。犯人は狂信者 (fanatic) だと批判しながらも、“Individuals with ferocious passions and ill-balanced minds are to be found in all countries” (激

しい情熱と偏った考え方を持つ人はどの国でも見つかるはずである)⁷⁸⁾と弁じ、この事件が発生したのは日本人の気質に起因しているわけではなく、ヨーロッパの首都でも起こり得る事件だったと述べている。

日清戦争の最後には、威海衛占領の際の日本軍に対する評価が述べられた。同地占領の前には、旅順占領の前と同じように清国軍が日本人を拷問して殺していた。しかしそれにもかかわらず、日本軍の報復の試みや、残虐行為、不必要な虐殺が一切発生しなかったことが報告された⁷⁹⁾。女性を優しく扱った兵士や戦闘の真ただ中に腕に赤ん坊を抱っこした大尉について報道され⁸⁰⁾、旅順虐殺事件によって失われていた文明化された日本軍が再認識されることとなった。さらに、“the principles of civilized warfare are evidently obtaining recognition throughout the whole East, owing to Japan’s example”（日本のおかげで、文明化された戦争の原則が明らかに東洋全体に認識されるようになった⁸¹⁾）として、日清戦争を通じて日本が東洋全体に西洋文明を広めたことが評価された。

以上、旅順虐殺事件の発生と、その後日清戦争の終盤までの *The Times* の対日観の移り変わりを考察した。旅順虐殺事件の発生により一時期、日本は西洋化前の状態に逆戻りしたと批判されたが、清が防御力を強化していた威海衛を簡単に占領したことによって日本軍の軍事力への評価が再び高まった。李鴻章狙撃事件を受けても日本評価の姿勢は変わらず、日清戦争の最後には日清戦争の意義として日本が東洋全体に西洋文明を広めたということで、日本を評価していたことが明らかになった。

2 *The New York Times* の対日観の変化

本節では *The New York Times* の対日観に注目する。同紙においては、*The Times* の1ヶ月後の1894年12月13日に旅順虐殺事件の第一報が報道され、その後、1895年3月までの4ヶ月間、旅順虐殺事件に関連する記事が掲載された。しかし1895年2月1日に威海衛占領の第一報が報道されて以降、事件の扱いが少なくなったため⁸²⁾、1894年12月13日から1895年1月31日を「旅順虐殺事件の報道期間」とし、1895年2月1日から日清講和条約が締結された4月17日までを「日清戦争の終盤」として、旅順虐殺事件の発覚から日清戦争の終わりまでの対日観の移り変わりを考察する。

The New York Times の特徴は、旅順虐殺事件の第一報が報道されてから日清戦争の終わりまで日本を批判する記事がほとんど掲載されなかったことである。前

章第2節で述べたように、*The New York Times* では黄海海戦より前には日本の野蛮性について言及してそれを批判していたことから、旅順虐殺事件に接して日本軍の野蛮性を批判することが予想されたが、実際は異なっていた。

その原因として考えられるのは、日本軍の残虐性を表す情報がほとんど入手できていなかったことにある。

旅順虐殺事件の報道期間において日本軍の野蛮性を表している記事は、旅順占領の後に抑制のない殺人の支配 (unrestrained reign of murder) があってほとんどすべての住民が無残にも虐殺された (butchered in cold blood) こと⁸³⁾ と、日本軍が旅順占領に続いて旅順の全人口を無残に「虐殺」した (“massacre”...in cold blood) こと⁸⁴⁾、日本軍が無慈悲な気質 (merciless disposition) を表に出し、清国人の殺害が不必要な規模で行われたということ⁸⁵⁾ のみである。3月には旅順虐殺事件を最初に報告したとされた12月11日付の横浜からの電報が掲載されたが⁸⁶⁾、その内容は上記のものに加えて、無防備で武装していない住民たちが家で虐殺 (butchered) されてその遺体が言い表せないほど切り裂かれた (unspeakably mutilated) ことと、街全体が恐ろしい残虐行為で略奪された (plundered with appalling atrocities) ことを述べているだけだった。それらはすべて抽象的な表現に留まっていて、*The Times* で報道されていたような日本軍による虐殺の具体例がまったく報告されていないことがわかる。このように日本の残虐性を具体的に表す情報がなかったことから、“Perhaps the atrocities will not turn out to have been so bad, after all; and it may be that it will be discovered that there were no atrocities at all.” (もしかすると、その残虐行為は結局、それほど悪いものだったとはならないかもしれないし、残虐行為がまったくなかったことが発見されるかもしれない。)⁸⁷⁾ と述べられるほど旅順虐殺事件の発生が現実味を帯びなかったと考えられる。その結果、“this war will remain the battle of civilization against barbarism” (この戦争は依然として文明と野蛮の間の戦いのままである)⁸⁸⁾ として、黄海海戦の後から評価していた日本の文明化を否定することなく、日本の行動に対する批判もされなかったのである。

もっとも、日本軍が威海衛を占領して日清戦争の終盤になると、旅順虐殺事件を批判する記事が散見された。それは、旅順虐殺事件によって日本の野蛮性 (barbarian) が明らかになったという主張⁸⁹⁾、また、旅順虐殺事件が日本の文明化の最初の汚点 (first stain upon Japan civilization) であって事件の瞬間に日本人は野蛮人に逆戻りした (relapsed into barbarism) という主張⁹⁰⁾、さらに、旅順虐殺事

件を受けて日本の文明化の徹底が疑問視され、日本は「保護観察中」(“on probation”)であるという主張⁹¹⁾である。

確かにこのような批判があったものの、日清戦争の終盤まで日本評価の姿勢は維持され続けた。日本はキリスト教世界と戦争をせずに接している唯一の国であり、“it has now reached political equality with the civilized nations” (今や政治的に文明国と対等の位置にある)⁹²⁾ こと、日本の世界の一等国 (first-class powers of the world) への加入と国家の自意識の覚醒 (national self-consciousness) が実現していることが評価された⁹³⁾。また、日本人は、ヨーロッパと同様に優れた軍隊を創設することも、プロイセンの規律の下にすばらしい軍隊を組織することもできる人々であると解説された⁹⁴⁾。さらに日本の、兵士とお金の面で優位な敵に対する連続の勝利、それに加えて野蛮からの高等文明への瞬時の飛躍は、今半世紀の中で最も印象的な現象である (the most impressive phenomenon of this half century) とすら主張された⁹⁵⁾。この点においても、旅順虐殺事件は *The New York Times* の対日観に影響をほとんど与えなかったということがわかる。

しかしこのように一貫していた日本評価の姿勢を揺るがせたのが、前述した李鴻章狙撃事件の発生である。下関で講和会談を行っていたことから李鴻章は日本の保護下にいる特使だったため、そのような人物を政府が守ることができずに日本国民によって殺された場合には、日本の人道性に大きな影響を与え⁹⁶⁾、世界は日本政府に対して不愉快な印象 (unpleasant impression) を抱くだろう⁹⁷⁾ と論じられた。ここから、李鴻章狙撃事件を受けて、日本評価の姿勢が日本批判へと変化しかけていたことが読み取れる。しかし李鴻章は亡くなることなく日清講和条約締結まで交渉を続けたため、*The New York Times* が日本批判の姿勢に転じることは回避された。

日清戦争の最後には、日清戦争を通じて日本に課された任務についての評価が述べられている。前章第2節で述べたように、*The New York Times* においては黄海海戦の後から日清戦争は文明と野蛮の戦いと位置づけており、日清戦争の終わりに近づいても、日本の勝利は “proved that there are not two civilizations in the world, but only one” (世界には二つの文明は存在せず、たった一つしかないことを証明した)⁹⁸⁾ こと、そして “that is the civilization of Europe and America, and...whatever is not that is barbarism” (それはヨーロッパとアメリカの文明であり、そうではないものはすべて野蛮である)⁹⁹⁾ ということが述べられている。それを受けて、日清戦争の終了間際には、日清戦争を経て日本に課された任務は清を近代化して文明化

させることであるとしている¹⁰⁰⁾。清を近代化して文明化させることは今まで欧米が失敗してきたことであるため、それを成功させることができれば、日本にとってはすばらしく十分な栄光になるだろうと期待している¹⁰¹⁾。つまり、日本が日清戦争を経て欧米と同等の立場になったとみなしただけではなく、欧米が成し得なかったことを実現できる国と考えられていたことがわかる。

以上、旅順虐殺事件の発生と、その後日清戦争の終盤までの *The New York Times* の対日観の移り変わりを考察した。旅順虐殺事件の報道期間において日本軍による虐殺の具体的な情報が手に入らなかったこともあって日本批判につながらず、黄海海戦の後から続いていた日本評価の姿勢は維持された。李鴻章狙撃事件を境に日本批判に傾斜しかけたが、李鴻章が亡くならなかったことで日清講和条約の締結まで日本評価の姿勢を維持し続け、最後には、今まで欧米が失敗してきた清の文明化という任務を日本に期待するまでになったことが明らかになった。

小 括

本章では、1894年11月21日の旅順占領後に発生した日本軍による旅順虐殺事件が発覚した際の対日観、そしてその後1895年4月17日の日清講和条約の締結までの対日観の移り変わりについて考察した。

黄海海戦の後から両紙は共通して日本を大国の一員として認めていたが、旅順虐殺事件の報道を境に *The Times* は日本批判へと変化した一方で、*The New York Times* は日本評価を維持し続けた。しかし威海衛占領を受けて *The Times* が日本の軍事力を再び評価し始めると両紙は共通して日本評価の姿勢となったが、李鴻章狙撃事件によって *The New York Times* は日本批判に傾斜しかけた。しかし最終的に両紙は日清戦争を経て日本を文明国と位置づけ、東洋における西洋文明の拡大の担い手と評価したのである。

終 章

本論文では、日清戦争における黄海海戦と旅順虐殺事件を中心にイギリスの *The Times* とアメリカの *The New York Times* における日本に関する報道を分析し、日清戦争中における両紙の対日観の移り変わりを明らかにした。

日清戦争は始まった当初から両紙とも日本の西洋化に対してある一定の評価をしていたが、*The Times* ではそれが日本の勝利の要因になると考えられていた一

方で、*The New York Times* ではそれより清の人口や資源における量的優位が戦争の結果を左右すると考えられていたことに違いがあった。しかし日本の海軍力が証明された黄海海戦を経てからは、*The Times* では日本が戦争を見据えて準備をし続けてきたことや西洋より優れた点をも持つようになったことが評価され、*The New York Times* では日本の西洋化、文明化が完成したことが評価され、両紙は共通して日本が大国の仲間入りを果たしたと評価した。

旅順虐殺事件が明らかになると、*The Times* では日本評価の姿勢が一転した。旅順占領前における清国人兵士による日本人兵士の虐殺や、農民への変装など、考慮することはあるとはしつつも、日本は東洋的な野蛮性による行動を起こしたとして西洋化する前の野蛮な東洋国家に逆戻りしたと批判された。それに対して *The New York Times* では旅順虐殺事件における日本の残虐行為の情報がまったく手に入らなかったこともあって日本批判にはつながらず、むしろ清軍の残虐性の被害者となっていた日本軍を擁護していた。

その後 *The Times* においては、清が防御力を強化していた威海衛を日本があまりにも早く占領したことにより日本軍が再評価された。その評価は、清国全権大使の李鴻章が日本において狙撃されても日本批判にはつながらず、日清戦争の終盤には日清戦争を経て日本が東洋全体に西洋文明を広めたことを一つの功績として称賛していた。

一方で *The New York Times* は、李鴻章狙撃事件の際には、もし李鴻章が亡くなれば日本の人道性を疑うことになることになると評価が悪化しかけたが、李鴻章が亡くならなかったために日本批判の姿勢に転じることはなかった。その後はそのまま日清戦争の終盤まで日本評価の姿勢を持ち続け、今まで欧米が成し得なかった中国の文明化を担う国として期待を持つまでになった。

このようにして日清戦争によって *The Times* と *The New York Times* の対日観は移り変わり、日清戦争が終わるころには両紙とも日本を、東洋全体を西洋化する国として評価するようになった。必死に西洋化している極東の国としかとらえられていなかった日本は、日清戦争を経てその存在感を欧米に見せつけて大国として認められ、近代日本の大きな目標だった治外法権の撤廃を実現してその後の関税自主権の回復につながる大きな一歩を踏み出したのである。

- 1) 原田敬一「日本国民の参戦熱」、大谷正『『文明戦争』と軍夫』（大谷正・原田敬一編『日清戦争の社会史—「文明戦争」と民衆』〈フォーラム・A、1994年〉）。
- 2) 檜山幸夫「日清戦争の歴史的位置—『五十年戦争』としての日清戦争—」（東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』〈ゆまに書房、1997年〉）。
- 3) 藤村道生『日清戦争』（岩波書店、1982年）。
- 4) 大江志乃夫『東アジア史としての日清戦争』（立風書房、1998年）。
- 5) 例外として、イアン・ニッシュ（斎藤聖二訳）「日清戦争とイギリス」（東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』〈ゆまに書房、1997年〉）において、日本海軍をイギリス人が指揮していたことから戦争初期においてイギリスは日本に好意を持っていたが、イギリスが日清戦争の平和的解決を試みている中で日本がイギリスの調停を拒否したことでその好意が薄れていったことが述べられている。
- 6) 高級紙とは知識層を対象にした新聞である。
- 7) 磯部佑一郎『イギリス新聞史』（ジャパン タイムズ、1984年）。
- 8) 磯部佑一郎『アメリカ新聞史』（ジャパン タイムズ、1984年）。
- 9) 全記事数である679記事のうち、約45%の300記事は“China and Japan”、“The War in the East”、“The Chino-Japanese War”という題名になっている。そのほかにも“The Battle of the Yalu”のような、戦場の地名が題名になっていたものも多かった。
- 10) 1894年8月のタイトルを例に挙げると、“China Lost Three War Ships”、“Thinks China Must Win”、“Numbers Will Probably Win”、“Degradation of the Viceroy”、“Routed the Chinese Troops”、“Japanese Ship of War Sunk”、“Thinks Japan Will Win”、“Chinese Loss at Seikwan”、“Japanese Fleet Defeated”、“China’s Defeat Impossible”、“Reported Japanese Victory”、“Japan Pressing the Fight”、“A Victory for the Chinese”、“Japan Confident of Victory”、“Japan’s Defeat at Ping-Yang”、“Victories Claimed by China”などがある。
- 11) 記事の冒頭に“From The London Times of Oct. 13.”と書かれているため、*The Times* から転載されたものだとわかる。
- 12) The Outlook in China. (1894, October 13). *The Times*, p. 10.
- 13) China Will Eventually Win. (1894, October 28). *The New York Times*, p. 28.
- 14) 1面の掲載に関しては、*The Times* は1面が全面広告だったため、2面を実質的な1面として計算している。
- 15) 記事の中で日本、もしくは日本に関係することが述べられている記事を数えたものをグラフにした。
- 16) 黄海海戦に関する記事が、*The Times* においては9月に13記事、10月に11記事あったのに対して、*The New York Times* においては9月に6記事、10月に2記事に留まったため。
- 17) 李鴻章について報道する記事は、3月中で*The Times* は18記事、*The New York*

Times は26記事だった。

- 18) China and Japan. (1894, August 18). *The Times*, p. 5.
- 19) The Situation in Korea. (1894, August 28). *The Times*, p. 7.
- 20) The Battle of the Yalu. (1894, November 2). *The Times*, p. 12.
- 21) The Japanese Victory. (1894, September 18). *The Times*, p. 7.
- 22) The Two Great Rivals in the Far East. (1894, September 4). *The Times*, p. 8.
- 23) The Chinese Army. (1894, August 6). *The Times*, p. 6.; China and Japan. (1894, August 6). *The Times*, p. 7.
- 24) The War in the East. (1894, September 17). *The Times*, p. 4.
- 25) Ibid.
- 26) The War in the East. (1894, September 22). *The Times*, p. 5.; The Japanese Victories. (1894, September 24). *The Times*, p. 7.; The War in the East. (1894, October 2). *The Times*, p. 3.; The Chinese Army. (1894, October 4). *The Times*, p. 7.; Mr. Curzon's Book on the Far East. (1894, October 8). *The Times*, p. 4.; The War in the East. (1894, October 9). *The Times*, p. 7.; The Battle of the Yalu. (1894, November 2). op. cit.; Sir Thomas Wade on China and Japan. (1894, November 5). *The Times*, p. 11.
- 27) The Chinese Army. (1894, August 6). op. cit.
- 28) Sir Thomas Wade on China and Japan. (1894, November 5). op. cit.
- 29) China and Japan—A Contrast. (1894, October 9). *The Times*, p. 6.
- 30) The War in the East. (1894, October 2). op. cit.; A Naval Officer. (1894, October 3). The Lessons of the Engagement off the Yalu. *The Times*, p. 4.; The War in the East. (1894, October 4). *The Times*, p. 6.
- 31) The Japanese Victories. (1894, September 24). op. cit.
- 32) The War in the East. (1894, October 9). op. cit.
- 33) Mr. Curzon's Book on the Far East. (1894, October 8). op. cit.
- 34) China and Japan. (1894, October 10). *The Times*, p. 9.
- 35) The Japanese Victories. (1894, September 24). op. cit.
- 36) The Far East. (1894, September 30). *The Sunday Times*, p. 4.
- 37) The Army of Modern Japan. (1894, August 13). *The New York Times*, p. 5.
- 38) Conflict Coming in Germany. (1894, August 6). *The New York Times*, p. 9.
- 39) Japanese Students in Europe. (1894, August 12). *The New York Times*, p. 4.
- 40) Violated the Laws of Peace. (1894, August 13). *The New York Times*, p. 5.
- 41) The Two Countries' Chances. (1894, August 2). *The New York Times*, p. 5.
- 42) Features of Japan's Navy. (1894, August 2). *The New York Times*, p. 5.
- 43) Numbers Will Probably Win. (1894, August 2). *The New York Times*, p. 5.
- 44) Features of Japan's Navy. (1894, August 2). op. cit.; The Two Countries' Chances. (1894, August 2). op. cit.; Numbers Will Probably Win. (1894, August 2). op. cit.; Thinks China Must Win. (1894, August 2). *The New York Times*, p. 5.; The Army of

- Modern Japan. (1894, August 13). op. cit.
- 45) The Japanese Victories. (1894, September 22). *The New York Times*, p. 4.
- 46) Paragraphs for Children. (1894, November 4). *The New York Times*, p. 18.
- 47) Modern Ships of War. (1894, November 16). *The New York Times*, p. 16.
- 48) Japan and Europe. (1894, October 7). *The New York Times*, p. 4.
- 49) Civilization Against Barbarism. (1894, October 1). *The New York Times*, p. 5.
- 50) The Collapse of China. (1894, November 18). *The New York Times*, p. 4.
- 51) Result of the War in Doubt. (1894, August 30). *The New York Times*, p. 5.; No Title. (1894, September 8). *The New York Times*, p. 4.
- 52) No Title. (1894, August 5). *The New York Times*, p. 1.
- 53) No Title. (1894, August 8). *The New York Times*, p. 4.
- 54) Paragraphs for Children. (1894, November 4). op. cit.
- 55) No Title. (1894, November 21). *The New York Times*, p. 4.
- 56) 例外として、4月に一度だけ事件名が登場する (Conduct of the Japanese at Wei-Hai-Wei. (1895, April 5). *The Times*, p. 14.)。
- 57) The War in the East. (1894, November 28). *The Times*, p. 5.
- 58) The War in the East. (1894, November 29). *The Times*, p. 5.
- 59) Ibid.
- 60) The Atrocities After the Fall of Port Arthur. (1895, January 8). *The Times*, p. 6.
- 61) Ibid.
- 62) H. O. W. (1895, January 16). An Historic Parallel. *The Times*, p. 11.
- 63) Red Cross and Massacre. (1895, January 8). *The Times*, p. 9.
- 64) 昔の日本に関して、“The traditions of old Japan are of a somewhat sanguinary kind ...” (昔の日本の伝統はやや残忍なものである。)と述べられている (Ibid.)。また、日本は“a land whose domestic annals have been deeply stained with violence and bloodshed in the memory of the present generation” (今の世代の記憶の中において国内の歴史が暴力と流血でひどく汚れている国)だとも述べている (China and Japan. (1895, March 25). *The Times*, p. 9.)。
- 65) The Atrocities After the Fall of Port Arthur. (1895, January 8). op. cit.
- 66) The Japanese Advance. (1895, January 24). *The Times*, p. 9.
- 67) Red Cross and Massacre. (1895, January 8). op. cit.
- 68) The Port Arthur Atrocities. (1895, February 1). *The Times*, p. 4.
- 69) The Atrocities After the Fall of Port Arthur. (1895, January 8). op. cit.
- 70) Ibid.
- 71) Red Cross and Massacre. (1895, January 8). op. cit.
- 72) The Massacre at Port Arthur. (1895, January 11). *The Times*, p. 7.
- 73) The Japanese Advance. (1895, February 2). *The Times*, p. 9.
- 74) The War in the East. (1895, February 4). *The Times*, p. 8.
- 75) The War in the East. (1895, February 13). *The Times*, p. 10.; The Weavers’

- Company. (1895, February 21). *The Times*, p. 10.
- 76) The War in the East. (1895, February 4). op. cit.
- 77) Ibid.
- 78) China and Japan. (1895, March 25). op. cit.
- 79) Conduct of the Japanese at Wei-Hai-Wei. (1895, April 5). op. cit.
- 80) Ibid.
- 81) Ibid.
- 82) 1895年2月1日以降は、2月に1記事 (Fresh from War Scenes. (1895, February 8). *The New York Times*, p. 9.) と、3月に2記事 (A Japanese Student. (1895, March 20). Japan Asks Only Justice. *The New York Times*, p. 9-10.; Japan in Disgrace. (1895, March 26). *The New York Times*, p. 4.) のみで扱われた。
- 83) Foo-Chow Made No Opposition. (1894, December 13). *The New York Times*, p. 5.
- 84) Our New Treaty with Japan. (1894, December 17). *The New York Times*, p. 5.
- 85) Cruelty of the Chinese. (1895, January 1). *The New York Times*, p. 5.
- 86) A Japanese Student. (1895, March 20). Japan Asks Only Justice. op. cit.
- 87) Our New Treaty with Japan. (1894, December 17). op. cit.
- 88) Japanese Accused Unjustly. (1894, December 30). *The New York Times*, p. 9.
- 89) Fresh from War Scenes. (1895, February 8). op. cit.
- 90) A Japanese Student. (1895, March 20). Japan Asks Only Justice. op. cit.
- 91) Japan in Disgrace. (1895, March 26). op.cit.
- 92) A Missionary's View of Japan. (1895, February 11). *The New York Times*, p. 10.
- 93) Count Ito's Speech. (1895, March 12). *The New York Times*, p. 4.
- 94) What May Happen in the East. (1895, March 15). *The New York Times*, p. 4.
- 95) China's Opportunity. (1895, April 1). *The New York Times*, p. 4.
- 96) Li Hung Chang and Japan. (1895, March 27). *The New York Times*, p. 4.
- 97) Li Hung Chang and the Armistice. (1895, March 31). *The New York Times*, p. 4.
- 98) A Triumph of Civilization. (1895, February 12). *The New York Times*, p. 4.
- 99) Japan and China. (1895, April 9). *The New York Times*, p. 4.
- 100) The Peace in the East. (1895, April 13). *The New York Times*, p. 4.
- 101) Ibid.